

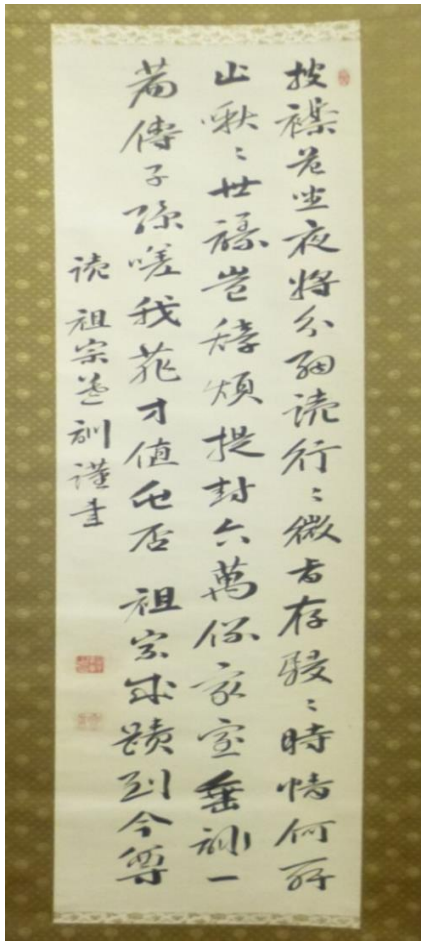
# 吉川史料館たより

第71号  
2019年  
(令和元年)  
6月20日  
木曜日

## 展示品紹介

このたびは、七言律詩について紹介  
します。これは、岩国十二代藩主吉川  
経幹が祖宗の訓と題し、作成した漢詩  
です。祖宗の訓とは、吉川広家が息子  
二人に宛てた示訓(訓戒)のことで、  
経幹は『安斎公御示訓』として書写し、  
その訓戒を大切にしています。

披襟危坐夜将分 細読行々微旨存  
駸々時情何所止 啾々世議豈辞煩  
提封六万保家宝 垂訓一篇伝子孫  
嗟我非才值屯否 祖宗成蹟到今尊  
読祖宗遺訓謹書



七言律詩 吉川経幹筆

### (内容)

世間の状況がめまぐるしく変わり、  
あわただしくなる中でそれをとめる方  
法もない。世の中の様々な議論がされ  
ているがこの煩わしさから逃がれるこ  
ともできない。六万石の封を家宝とし  
て保ち、子孫に一篇の訓戒を伝えよう。  
ああ、私の非才に情けない気持ちだが、  
先祖広家の功績を尊ぶにいたる。

広家の功績を尊ぶとは、おそらく関  
ヶ原の合戦の時の事ではないでしょう  
か。広家は当時意見が統一せず、また  
戦況を考えて徳川側と和睦した方が有  
利と考えました。決して単独ではなく、

### 発行所

吉川史料館

山口県岩国市横山二丁目七一三

郵便番号 七四一〇〇八一

電話番号 (〇八二七) 一四一 一〇一〇

福原広俊と共に徳川方へ交渉を行いま  
した。当時の広家の心境は、これから  
毛利家はどうかなるのか強い不安を感じ  
たのです。それは覚書案(吉川家文書九  
一七)にも記されています。広家は、合  
戦の当日に忠誠をみせるために不戦を  
貫きました。

経幹は、自身の歴史を編纂していく  
なかで藩祖広家の行動を把握していく  
と共に家を守るために必死で生きたこ  
とへの尊敬の念を強く抱くようになり  
ました。例えば、文久三年九月十六日  
に長州藩は、率兵入京の決議をしまし  
ましたが、経幹だけはこのことに強く反対  
しました。理由は無謀な行為としか思  
えなかったためです。この考え方は、  
広家の示訓の「一、不依高下人は恥利  
慾招悪事候間御得心肝要第一二候事」  
(身分高い低いにかかわらず利慾を恥  
じ、悪事を招かないようにすることが  
一番大事)と共通しています。

南方厚著の『吉川経幹卿略伝』の文  
久三年十二月の条には、毛利家の役人  
に対して経幹は「我が祖先の・広家は  
かつてこのような事を言った。ともか  
くも毛利宗家が利欲あれば嫌疑をうけ、  
禁忌(災い)が起こる。そのような事だ  
と判断した時は再三忠告すべきである。

今の長州藩の決定はまさに利欲である、  
私は広家の訓えに従っているまでだけ  
だ。」述べたと記しています。

元治元年(一八六四)七月、結局、経  
幹が反対しても率兵上京は実行されま  
した。これは、毛利敬親の要請を受け  
てのことでした。敬親の世子・定広に  
従って経幹らが瀬戸内海を進んでいく  
途中、禁門の変が起こりました。これ  
は、すでに上京していた長州軍が御所  
の近くにて会津と薩摩藩と武力衝突し、  
長州藩の放った鉄砲の弾が蛤御門に当  
たり、幕府は長州征討令を下しました。  
長州藩は存亡の危機に直面します。  
まさに禁忌を避けられない状況になり  
ました。

経幹は、毛利敬親の依頼をうけて戦  
争回避に向けて福岡藩や広島藩へ幕府  
への協力を求めて行動していきます。  
長州藩の恭順姿勢を示すことで戦争回  
避は実現しました。毛利敬親は、経幹  
に感謝をしています。

一方で、諸隊や高杉晋作のように恭  
順姿勢を示すことに不満をもつ人々は  
居りました。しかし、経幹が領地を守  
ろうとした気持ちの方が強く、その手  
本が吉川広家だったので。

(原田史子)